1985年11月5日発行(毎月1回5日発行) 1984年2月10日第二種郵便物認可 ISSN 0286-4479

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

1985年
11月号
(通巻44号)
400円

特集 根をおろす独立文化運動

地下活動家B・ボルセヴィチとのインタビュー

ポーランド月報　1985年11月号目次

国会選挙ボイコットの呼びかけ……3
80年8月～85年8月の最大事件は？……5
——「連帯」指導者に聞く　(続)
根をおろす独立文化運動
われわれは大衆演劇です……8
「第8日劇場」座長レフ・ラチェク
インタビュー
映画の切符を買うように……9
「ビデオノヴァ」とのインタビュー
独立出版活動
歴史書：何が読めて何が読めないか……11
『週刊マゾフシェ』
僕は現在を考える……14
B・ボルセヴィチとのインタビュー
ポーランド現代史断章⑧
1976年　ラドム・ウルスス事件……20
——《成功宣伝》のはてに
工藤　幸雄
ポーランド料理……22
ポーランド日誌……2・23

ポーランド日誌

1985年8月22日～9月26日

8月22日　ウルバン政府スポークスマン、記者会見で経済問題について、工業生産と住宅建設に若干の懸念があるが農業は良好な収穫の見通しと語る。

8月25日　ワレサがフランスのＡＦＰ通信と会見、今後、「ドンパチはないがもっと興味深い」大闘争を展開するための〝長征戦略〟を近く発表すると語る。ワレサは、「長征戦略は、『腹が減ってはいくさはできぬ』ため、民主的要求と経済的要求を対等に据えるだろう。現在は政府との対決や、派手だが不確かな全国的勝利の時期ではない。対話の模索のみが解決を生む道だ」と語る。この日ワルシャワの聖スタニスワフ教会の「祖国のためのミサ」で全国から集まった1万5千人を前に、ザヴィウコフスキ神父は「連帯」とともに生まれた希望が押しつぶされたのは不幸なことだ、悔しみと暴力の上に祖国は築けない、と語る。

8月26日　グレンプ枢機卿は、チェンストホヴァのヤスナグラ寺院で2万人の巡礼者に向かい、政府がカトリックの社会生活参加を阻害し、学校で無神論教育を推進していると批判。

8月27日　ワレサ、グダンスク協定5周年を記念する声明を発表。今日必要なのは、大衆的街頭デモではなく、将来へむけた具体的プログラムを作成する少数の賢者グループだと語る。また、「政府は移りゆくが国民は残る。いかなる国民も自由を隷属と、民主主義を独裁と交換しはしない」と述べる。6月に逮捕されたタデウシュ・イェディナクの釈放を求める「連帯」活動家50名（ワレサも含む）の声明が発表される。官製新労組の組合員は550万、うち60%が労働者、と報道される。

8月29日　国際自由労連、世界労働総同盟、欧州労連が「連帯」への精神的・物質的援助の継続を声明。

8月30日　ワレサは造船所勤務終了後、70年事件記念碑に赤白のバラの花を献花。数百～千数百の群集にＶサインを示し、「将軍、われわれは『連帯』をあきらめません」と言う。この後聖ブリギッダ教会で西側記者団と会見したワレサは、「連帯」顧問たちのまとめた500ページに及ぶ現状分析およびそれを16ページに要約した資料を公開する。

8月31日　ワルシャワの聖スタニスワフ教会でのグダンスク協定5周年特別ミサに、1万～1万5000人が参加。ミサ後、教会の外で人垣に守られた何者かが「連帯」への忠誠をハンドスピーカーで読み上げる。この後少なくとも2000人が近くの広場で反政府・親「連帯」スローガンを叫ぶ。建物の間の別のスピーカーからは故ポピェウシコ神父や地下「連帯」指導者Ｚ・ブヤクの声が流れる。ブヤクは「政府との協定を結ぶことをやめ、精神的・物質的窮乏から国民を救うことがわれわれの任務」と語り、また10月の国会選挙ボイコットを呼びかける。ヴロツワフでは、1980年スト記念碑に献花しようとしたユゼフ・ピニオル他2名の活動家が逮捕される。グダンスクでは聖ブリギッダ教会での記念ミサに7000～1万人が参加、ワレサ、Ｂ・ゲレメク、Ｔ・マゾヴィエツキら「連帯」指導者が喝采をうける。クラクフでは約2000人のデモが警察に解散させられる。ポズナン、シチェチン、ビャウォガル 【23頁へ続く】

国会選挙ボイコットの呼びかけ

Appeal for a boycott of the Sejm
"News Solidarność", Nos. 53, 54, 1985. 9. 15, 30.

「連帯」暫定調整委員会声明
1985年7月16日

投票ボイコットを！

独立自治労組「連帯」暫定調整委員会は、1985年10月13日に予定されている国会選挙のボイコットを呼びかける。

わが組合の目標のひとつは、国会が国民の最高権威としての役割を回復し、ポーランド国会としての名称にふさわしいものとなるようにすることである。最近制定された選挙法はこの目標にいささかも貢献するものではない。国会は、第2次大戦後の選挙を偽造してきたあの同じ勢力の手中の柔順な道具たり続けている。共産党政府は統治を続けるだけでは満足しない。彼らはまた、臣下に対し卑屈な賛美をも要求する。国会選挙はまさにこの卑屈な賛美にほかならない。今日、われわれ1人1人が、この忠誠の証しとしての集団的行動への参加を拒否するか否かの決定をせまられている。この4年間がもたらしたものは、弾圧と不正と傲慢、経済情勢の一層の悪化、そしてポーランドをより良くし社会的平和を達成するためのあらゆる手段の破壊である。このような4年間のあとなおも選挙に加わわるとすれば、それはわれわれの社会的、国民的願望すべての否定を意味しよう。それは本質的に、戒厳令の犯罪について道徳的に共同責任を引き受けることを意味する。

このようなことを許してはならない。

選挙への参加を拒否することによって、われわれは虚偽に対して真実を選び、自由の名に値する存在となり、民族の主権へ向けて一歩近付くのである。これがボイコットの道義的内実である。

宣伝的欺瞞への参加拒否は、ポーランドにおける有意義な変化を求めるわれわれの全体的希望を表現する。われわれは、市民1人1人の公的生活への真の参加を保証する、そんな変化を必要としている。われわれが必要としているのは、われわれに自由労働組合結成の権利を与える変化、住民1人1人によりよい生活の可能性を保証する合理的に機能する経済の基礎を作り出す変化、社会的自覚にめざめた市民の教育と検閲のない国民文化の隆盛を可能とする変化である。

40年にもわたってわれわれは、個々人は自らが生活する世界に対し影響を及ぼしえず、各人は1人でその絶望感に耐えるべきだと思い込まされてきた。1980年8月、われわれは新しいことを学んだ。われわれは、組織を通じて変化が可能であることを学んだ。われわれの力は、ポーランド人民の独立自治労働組合、「連帯」にある。

独立自治労組「連帯」暫定調整委員会はいま、自由が空虚な言葉ではないすべての人々に対し、国会選挙の投票ボイコットを訴える。

コミュニケ

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会は1985年7月16日その会議を開いた。

1　国会選挙投票ボイコットの呼びかけに関連して、ワルシャワのコンラッド・ビエリンスキが、投票率の監視にあたるTKK責任者に任命された。地方の選挙監視責任者が未定のところでは、早急にこれを任命すべきことが強調された。

2　独立自治労組「連帯」暫定調整委員会は、本年8月31日がグダンスク協定の5周年にあたることを想起するようすべての人々に訴える。

「連帯」記念日の各地方における祝賀行事の重点は、いまだ解決されない政治囚の問題ときたるべき選挙ボイコットに置かれるべきである。

1985年7月16日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会
ボグダン・ボルセヴィチ（グダンスク）
ズビグニェフ・ブヤク（マゾフシェ）
マレク・ムシンスキ（下シロンスク）
クラクフ、ウッチ、上シロンスク各代表

「連帯」活動家100人の選挙ボイコット呼びかけ

以下に署名するわれわれは、10月の国会選挙に投票しないことを公けに宣言する。同時に、「連帯」の諸理念を尊重し、真実が個人的、社会的価値であるすべての人々がこの茶番的選挙を拒否するよう訴える。これが正しい決定であると確信する人々はすべて、白らを恥辱と脅怖と偽善から解放しうる友人たちに行動を共にするよう説得しよう。

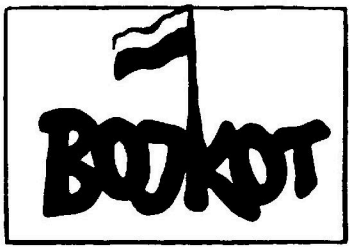
1985年のポーランドは、経済危機にのたうち、政治的、社会的諸問題の重みを負い、深まる貧困に苦しむ国である。それは、良心の囚人たちの、恣意的な警察支配の、基本的な市民的自由を制限し、労働組合運動や文化、科学を窒息させる法の国である。

国会選挙がまさに実施されようとしている国の現状は以上のとおりである。国会議員は政府によって指名され、国民は彼らを受け入れるものとされる。この茶番劇の目的は、現体制を固定化し、国民世論と国際世論に対しポーランド情勢が安定し、その諸問題は解決され、国民が政府を受け入れていることを誇示しようとするにある。それは、現状をとりつくろう努力にわれわれを巻き込もうとするもうひとつの試みである。

われわれは、自らの無力さを克服して、尊厳と勇気をもって抗議しなければならない。無人の投票所によって、われわれのいつ終るとも知れない意気阻喪を終らせ、社会、経済、文化の情勢悪化に終止符を打たなければならない。

選挙ボイコットは、うそと暴力の行使、政治囚、文明国にふさわしくない非常事態法、そしてわれわれの権利のさらなる剝奪に対するわれわれの拒否を示すものとならなければならない。

投票することは――その主観的意図にかかわりなく――イェジ・ポピェウシコ神父の虐殺に象徴されたわが国の悲劇に対し、意識的に責任を引き受けることである。これを忘れてはならない。投票することは、共産党の独裁と暴力に依拠する政府に対し、統治を委任し、承認を与えることである。自分自身の市民権のシニカルな抑圧に白ら従うことである。



ボイコットを呼びかけるポスター

これは、わが民族とその歴史、ポーランドと個個人の自由のために闘い犠牲となった過去の世代に対し、ふさわしくない態度である。

ヨハネ・パウロ２世の次の言葉を想起しよう。「自由とは賜物ではなく、務めである」。

1985年10月９日
以下「連帯」合法活動家100名の署名
〔署名にはポーランド全土19地方で合法的に活動を続ける100名の名がある。主な署名者は、ヴワディスワフ・フラシニュク、エウゲニウシュ・シュメイコ、カロル・モゼレフスキ（以上ヴロツワフ）、ヤン・ルレフスキ（ビドゴシチ）、アンジェイ・グヴィアズダ（グダンスク）、ヤツェク・クーロン、ヤヌシュ・オニシキェヴィチ、ズビグニェフ・ロマシェフスキ、ヘンリク・ヴエツ、ズビグニェフ・ヤナス（以上ワルシャワ）などで、レフ・ワレサの名はない〕

〔訳：水谷　驍〕

80年8月～85年8月の最大事件は？（続）

――「連帯」指導者に聞く――

Five Years After the Gdańsk Agreement
"Uncensored Poland News Bulletin", No. 18/85, 12 Sept. 85

【編注】　前号に続き、地下紙『週刊マゾフシェ』が「連帯」関係者に行ったアンケート「あなたの意見では、1980年8月から1985年8月までの間に起きた最大のでき事は何でしょうか？」に対する以下の7人の回答を紹介する。

レフ・ワレサ　「連帯」議長。
ズビグニェフ・ブヤク　合法期の「連帯」マゾフシェ地方本部議長。戒厳令後は「連帯」暫定調整委員会（TKK）の1員。
ヘンリク・サムソノヴィチ　歴史家。ワルシャワ大学教授。同大学前学長。1980年に初めて民主的に選出された学長。
ブロニスワフ・ゲレメク　歴史家。1980年8月の対政府交渉中の専門家委員の1人。「連帯」全国委員会顧問。最近、ポーランド科学アカデミー歴史学研究所から追放される。
ゾフィア・クラトフスカ　医学博士。血液学者。政治囚救援首座大司教付委員会の1員。
ヤヌシュ・ベクシャク　経済学者、中央計画統計大学（SGPiS）教授。邦訳書に『経営する社会』（岩田昌征訳、東大出版会）。
ヤヌシュ・シボタンスキ　作家、風刺作家。1960年代にその作品のゆえに投獄される。

建設のプログラムを――レフ・ワレサ

この問題については8月31日に包括的な声明を出すつもりでいる。重要な問題が数多くあり、そのどれひとつも見落としてはならない。本格的な責任ある声明を出したいと思う。いま言えるのは、1980年8月以降の最も重要なでき事は「連帯」そのものだということである。

「連帯」はわれわれの闘いの第1段階を加速し、同時に第2段階をもたらし、第3段階をさし示している。第1段階は40年間にわたって道を誤まってきたことすべてを明るみに出した。それは「否定」の時期で、それゆえに非常に建設的ではありえなかった。それは、より興味深く、より困難な第2段階の序幕にすぎなかった。「前向きのプログラム」を作成するためにはつねに、誤りと不適切のすべてを明らかにする必要がある。われわれがやったのはこれだ。だからこそ、第2段階のいま、われわれはプログラムを作ろうとしている。現在のわれわれの立場は「連帯」第1回全国大会の綱領からいささかも離れていない。あの綱領は一般的ではあったが正しかった。しかし今われわれに必要なのは、工場レベルの個々の組合単位組織のための詳細なプログラムである。これが第3段階――実行の段階――への橋渡しとなる。

画期的な「連帯」大会――ズビグニェフ・ブヤク

歴史的に言えば、1981年12月はポーランド戦後史の転換点を画す。戒厳令の施行は、1956年10月、1968年3月、1970年12月、1980年8月と並ぶ重大事件である。

12月13日を別とすれば、1980～85年の間のもうひとつの重大事件は明らかに「連帯」全国大会である。なぜか。それはポーランド人民共和国の40年の歴史上初めての、民主的に選ばれた社会の3分の1以上を代表する人々の集まりだったからである。代議員たちはあらゆる社会層、職業層を代

表していた。大会の記録と文書は「連帯」の理想と活動と目的のすべてを反映している。「連帯」は社会の願望を考慮し理解する組織で、社会の目ざすところに尽力しようとし、その実現の道をさし示し、1人1人に助けの手を差しのべる組織である。大会が承認した――過去形であることを強調したい――綱領は、わが国がいかに統治されるべきかという質問に対する回答であった。こうした観点からすれば、「連帯」第1回全国大会は、ポーランド人民共和国の40年の歴史上のみならず、他の共産主義圏諸国すべての歴史上、まったく特異なでき事だと言える。

戒厳令の導入はこの動きを押しとどめ、「連帯」を新しい状況下に置いた。国会選挙ボイコットよびかけに対する反応は、「連帯」がその新しい任務に耐えていけるか否かを示すだろう。来たるべき選挙の結果いかんは、「連帯」大会以上に重要な意味を持つこともありうる。ボイコットの成功は「連帯」の1981年12月以降の闘いのまたとない証しとなろう。ちょうど大会が「連帯」の活動の第1年目の証しとなったように。

歴史的な変化――ヘンリク・サムソノヴィチ

問題を学問的視点から検討してみたいと思う。一定の距離を置いて考えられるからだ。私の視点は最近の5年ではなく、40年、50年、あるいはそれ以上だ。この視点からすれば1980年から85年までの展開は積極的評価が与えられる。社会生活のきわめて重要な民主化が生じたと考える。なによりも、社会的意識が社会的要求の非常にはっきりした定式化、目的の完全な明確化を可能とする変化を経験した。歴史家としていえることだが、過去400年間、この種の変化を逆転させるのは不可能であった。

たとえばわれわれは、19世紀後半にポーランドで生じた変化を、ただ地主や貧農、あるいはワイダの映画「約束の土地」で描かれた人々の視点だけから評価することはできない。たとえ当時の人々の感情や見方を捨てることになるとしても、ポーランドにおける近代社会の発展という視点から状況を分析しなければならないのである。

実のところ、現在の状況、展望のなさに私はむしろ消沈している。しかしながら、ある日歴史教科書は1980～85年の時期を積極的な変化の時期と記すだろう。たしかに1981年と比較して目に見える後退が多くの分野に認められる。しかしわれわれはむしろ1970年代や60年代の状況と比較すべきなのだ。そうすれば、1980年8月が社会組織内にその痕跡を残していることがより一層はっきりする。

ブロニスワフ・ゲレメク

賢明な妥協の可能性――ブロニスワフ・ゲレメク

1980年8月から5年たった今日、あれはその重要性が今なお全面的には認識されていない偉大な変化の時だったということができる。戒厳令の導入や「連帯」の非合法化、拡がる弾圧の波、そして個々人と国民の基本権の無視等によってもこの変化が無に帰することはない。一方における社会と他方における政府当局が衝突したという事実を抹消するのは不可能である。このような衝突は東ヨーロッパで初めてのことだったわけではなく、もちろんポーランドでも初めてではなかった。しかし賢明な妥協に達する可能性があったのは初めてのことであった。あれは両方の側にとって、したがって国全体にとって偉大なチャンスだった。

また、人民の共同闘争と連帯という道義的側面も消し去ることは不可能である。80年8月とそして同じ年の7月――ルブリンでの忘れさられた7月〔80年7月16日、ルブリンで鉄道労働者を先頭に2日間のゼネストが闘われ、いったん鎮静化に向かいはじめたかに見えた7月1日以来の値上げ

抗議ストは新たな段階に入った――訳者〕――は国民の間に一連の新しい社会的願望を呼び覚ました。「連帯」――この前例を見ない労働組合――は、当時、一般的プログラムのうちに体現されていた言葉の真の意味の再評価、根本的な道徳的諸価値の再検討の結果として登場した。「連帯」が弾圧に耐えているのはこのためである。

1980年8月以降の展開が示すように、ポーランド人の願望は現実感覚を欠くものではなく、事実、政治的解決のための基礎を提供しうるものである。ただし問題は、この理性的な態度が、相手側の傲慢と頑迷との衝突にいつまで耐えられるかである。

故イェジィ・ポピエウシコ神父

犠牲をいとわぬ人民――ゾフィア・クラトフスカ

重大な社会的影響をもたらした重大事件が3つあった。

1　「連帯」の登場。これは抑圧された何百万の人々を覚醒させ、社会的活動を解き放った。これがなければ、自由も民族の発展もありえない。

2　戒厳令。これは社会の最も貴重な部分を堅固化し、国民の間の新しい強い絆の発展を助けている。それは、人民がより高い価値の名において犠牲を払いうることを示した。人民はまた、政治的、歴史的、宗教的諸問題に対しかつてないほどの関心を抱くようになった。1981年12月以降の時期は、弾圧にもかかわらず、社会的抵抗の高まりと、ふさわしい社会体制建設のための一層の努力の時期である。

3　ポピェウシコ神父の虐殺は、当局が用いるやり方に光をあてた。この虐殺は、体制順応のこの上もない背徳性、妥協の不可能性、そして脅しの無意味さを人々に悟らせたのである。人々が大挙して教会に向かった。この悲劇は、彼らの正体を明らかにし、われわれがいかに多数であるかを示した。

誠実、連帯、独立――ヤヌシュ・ベクシャク

過去5年間に本当に重要な2つの事件があった。「連帯」の登場と合法的「連帯」組織の圧殺である。最初のでき事により、抗議は新しい種類の社会組織を作って体制を変更する建設的な試みへと変化した。この経験は将来の教訓として役立つことができる。1981年12月13日の敗北はポーランド社会の意識を変えた。それは政治体制の評判を失墜させた。それはまた政府とその代表に対する恐怖を生み出し、軍と強力な指導性に対する伝統的な尊敬の念を掘り崩した。このような変化は、プラス、マイナス両方のさまざまな影響を及ぼす。しかしひとつのことだけは疑いえない。このふたつのでき事はわれわれの思考と感性を誠実、連帯、独立といった根本的諸価値に向かわせた。

自国に対する宣戦――ヤヌシュ・シポタンスキ

1980年から1985年までの間の最も重要なでき事は、もちろん、「連帯」の結成である。パニックに襲われた当局は（実際には彼らを脅かすものは何もなかったのだが）、きわめて異例な措置をとることとなった。自国民に対し戦争を宣言すること。政府当局は、自国に一種の占領体制をしき、そのことによって同時に、彼らの権威の残りすべてを失った。現在われわれはきわめて奇妙な状況に置かれている。政府当局と彼らの弾圧機関のすべての努力は、相手方――すなわち社会――が動くのを阻止することに集中されている。これは周知の真実を証明する以外の何ものでもない。すなわち、共産党政権がなしうるのは否定的対応だけである、と。

〔訳：水谷　驍〕

根をおろす独立文化運動

われわれは大衆演劇です

インタビュー：『第八日劇場』座長レフ・ラチェク

"Jesteśmy ludowym teatrem", rozmowy z Lechem Raczkiem, KierownikiemTeatru Ósmego Dnia
"Solidarność, Biuletyn Informacyjny", nr. 117/118/119

【訳者解説】 ポズナンの『第八日劇場』は、1968年、ポーランド学生同盟〔ＺＳＰ〕の後援を受けて結成された政治的劇団である。それは、1970年のギエレク政権登場のあとの、短い、限られた自由化の期間、人気劇団であった。「雪解け」の終わりとともに、1970年代半ばからはますます強まる検閲の圧力を劇団は味わうことになる。その政治的批判精神は、ポーランド社会主義学生同盟〔ＳＺＳＰ：1973年改組〕と名を変えた後援者にとって明らかな障害となっていた。当時、どの劇団もこうした後援者を必要としていた。公的組織の枠からはみ出した、真の自立した文化の活動家のことなど、まだ誰も考えられなかった頃のことである。1970年代末、他の学生演劇のグループ――『劇団100』『カラムブル』『劇団77』――がプロの劇団になっていったあと、『第八日劇場』はその後援者と円満に別れ、ポズナンの演芸プロダクション『エストラーダ』の傘下に入った。「連帯」の時代、劇団は、芸術的にも政治的にもまさしく際限のない表現の自由を謳歌した。そこへ戒厳令が施行された。

――それで12月13日〔戒厳令施行日〕のあとは？

公演は82年６月半ばまで禁止されたままでした。これはポーランドの全劇団中もっとも長期の公演禁止です。1983年、ついに解雇通知が来ました。県知事が資金援助の中止を決定したわけで、『エストラーダ』紙によれば、「独立採算の企業として、損失を被むるわけにはゆかないので補助金は打ち切る」というわけです。副首相のパイドルはもっとはっきり、劇団の政治姿勢に対する留保、だと言いました。

――そういうわけで教会での公演を？

1983年のことでしたが、われわれはジトニアから招かれました。その頃はまだ常勤扱いだったので〔解雇の〕口実を与えないために休暇をとって出かけていったのです。こちらから教会と接触を持ちはじめたのは失業してからです。それで、とても面白いと思い始めたのです。

――教会での公演は気に入っていますか？

教会付属のホールの方が好きですね。聖堂よりは中立的な性格を持っていますから。聖堂の方は、入って来た人に目の前で膝まづかれると（そこは秘蹟を受ける場所ですから）われわれはあがってしまいます。戒厳令以前は、われわれはインテリのための、特権的な、少数の観客を相手にする劇団でした。いまはポーランドでいちばん大衆的な劇団でしょう。ミサのあとで公演したりします。いちばん前の列には年とった女の人たちが座ります。教会にやって来て、生まれて初めて芝居を見ることになるわけです。彼女らがよく理解しているようには見えません。突然、中のひとりが首からメダルをもぎとってわれわれにくれたりするのです。もっとも、彼女らがわれわれの言いたいことを理解しているかどうかなんて、実はたいした意味を持たないのかもしれません。いちばん大切なのが、あの熱気なのです。ビエジャノヴァ、フニナ、ビラ、どこでもみんなそうでした。ミスツ

シェヨヴィツェでの『にがよもぎ』の初日は心配でした。この芝居には国境を罵しる場面が何回かありますから。1,000人もの人たちがやって来てくれました。われわれもこわかったし、観客の方もこわがっていました。しかしやがて熱狂が始まったのです。それは生まれてこのかた味わったことのないものでした、私はかれこれ20年もこの仕事をしているのにです。もしかするとかれらは理解したわけではないのかもしれない、でも……分かり合ったのは確かです。

――今、ほかに芸術の保護者を見つける当てはあるのでしょうか？

教会がなかったらわれわれは存在できません。白治会の強い大学と協力してやろうとしたこともあります。ポズナン大学では幕が上がる3時間前にカチマルク学長が決定を覆えしてしまいました。彼は〔統一労働者党〕県委員会の芸術部次長と副知事から「芝居は大学と国民的合意にとって害になるおそれがある」と吹き込まれたのです。ラドムの中央農業大学でも試してみましたが、ここでもだめでした。大学当局に対して何ができるはずの学生たちは罰則でおどかされて身動きのとれない状態なのです。しかしグダンスクではうまくゆきました。われわれは、演劇研究サークルのために、いわゆる学問的必要を満たすために上演したのです。400人が集まりました――研究サークルとしてはなかなかの数ですがね。

――今の後援者は劇団にとって制限とはなりませんか？

いまのところ、ほかに考えられません。われわれとしては1,000人もの観客というのは好みではないのですが、もしそれを50人に制限したりしたら、それは一歩後退となるでしょう。われわれは真の大衆演劇なのですから。1985年の4月と5月で1万人もの観客を目の前にしました。われわれの劇団としては史上最高です。

――あなたは、教会が当局の圧力に屈服し、自主文化の保護者たることをやめてしまうかもしれないとは考えないのですか？

もし教会が当局の圧力に屈したら、それはまずいことになります。今でも、宗教問題担当の役所の圧力とか、司教団会議の決定とかで芝居の幕あけ直前になって中止させられることが時々あります。今そのことは考えたくないのです。

〔訳：篠崎　誠一〕

映画の切符を買うように……

ビデオカセット社『ビデオノヴァ』とのインタビュー

Jak do kina――rozmowa z Videonową
"Solidarność, Biulletyn Informacyjny" Nr. 117/118/119, 10VII1985
("Tygodnik Mazowsze" nr. 129, 16. V. 1985)

――最近あなた方の会社のビデオ作品第1号としてリシャルド・ブガイスキの『尋問』が出ました。この作品の市場がポーランドにあるのですか？

われわれにとっても意外なことに、『尋問』の売れゆきは好調です。ポーランドには既にかなりの数のビデオテープレコーダーがあります。個人の手元にあるのがいちばん多いのですが、ほかにもいろいろなグループが共同で購入しています。『連帯』の職場委員会でもふつうの財政状態ならばビデオに投資できるのではないでしょうか。金額にして20万から30万ズウォティほどですから。ポーランドでいちばん一般的なビデオの方式はVHSで、それはまたテレビにうまく合うので、われわれのカセットもすべてVHS方式にしています。

――市場の様子はどうですか？

われわれは別に独占企業になるつもりはありません。ワルシャワでは自然に市場ができて、ビデオセットを持っている人たちが互いにテープの交換をしています。西側と同じように、ビデオはポ

ルノで始まりました、しかし今ではそれはほんのわずかな割合しか占めていません。海外から持ち込まれるものはそれこそごちゃごちゃです――チャールズ・ブロンソンのつまらないシリーズ物に始まって、ジェームス・ボンド物とか、「ディア・ハンター」とか。これらの大部分はテレビからとった海賊版です。中には科学番組からのものもあります。たとえばＮＢＣ製作のコンピューターについての解説がそうで、これは私自身が見ました。デモの報道とかダヌータ・ワレサのノーベル平和賞受賞式といったポーランド関係ニュースを録画したのもありますし、われわれ自身の製作になるものもあります。列挙してみますと、自分自身のテレビ局を持ったミスチシェヨヴィツェの教会の話、レフ・ワレサとのインタビュー、ポピェウシコ神父の葬儀のレポート、神父の運転手だったワルデマル・フロストフスキとのインタビュー、教会が組織した展覧会、アダム・ミフニクのアメリカの大学における名誉学位の授与式、といったところです。

――『ビデオノヴァ』は、ビデオセットを持つ人たちに何を提供するつもりでしょうか。

まず、お蔵入りになっているポーランド映画(文芸作品もドキュメンタリーも)です。できれば、１つのカセットに文芸作品とドキュメンタリーを諸に入れるつもりです。

――ニュース映画はまだない？

たぶん、できるでしょう。それは、時事性のある事件のドキュメントを製作しているグループとの共同作業になるはずです。ほかに、西側の映画の紹介も行ってゆくつもりでいます。

――今のところビデオは、二流、三流の映画がよく出回っているようですが。『ビデオノヴァ』としては、もっぱら野心的な作品の製作に照準を合わせてゆくつもりですか、それとも商業映画のコピーにとどまるのでしょうか？

『尋問』について言えば、われわれはちょっとしたアンケートを出して市場調査を行いました。われわれの出した50近いアンケート項目には、それはもういろいろな映画が入っていましたけれど、中でもスパイ物はかなりの部分を占めています。

「第八日劇場」の舞台より

こういった映画は現在まったく紹介されていません。なぜって、ＫＧＢの出演しないスパイ映画なんて撮りようがありませんからね。

われわれは、製作者の了解の上で一定の数のコピーを作るようにしています。それは、海賊版、つまり、作者の了解なしにテレビから録画する手合の仲間入りはしたくないからです。

――しかしそれではまったく特権階級向きということになるのでは……。

ビデオは、場合にもよりますが、テレビの競争相手、映画の代替物になると私は信じています。実際、このことが、われわれの自主文化をめざす戦いの武器なのです。われわれの課題は独占権力に打ち勝つことです。ビデオは、テレビを見たり、本を読んだり、カセットで音楽を聴いたりすることと比べて、もっと大きな娯楽という以外に、さらに大きな長所を持っています。それは、これまでの実践から分かるのですが、ビデオがみごとに人びとを団結させてくれるのです。撮影、配給の組織化、機器の入手、最後にはそのビデオを観ること、これらすべてはグループ作業で行われます。生テープは１本6,000ズウォティもしますし、録画済のものはその２倍、たとえば『尋問』は12,000ズウォティです。ビデオを観る料金は100ズウォティ……

――映画の切符を買うように、ですか。

〔訳：篠崎　誠〕

独立出版活動

歴史書――何が読めて　何が読めないか

『週刊マゾフシェ』

Independent Publishing : History　What is Available, What is Missing? by "Tygodnik Mazowsze"
"Uncensored Poland News Bulletin", No. 19/85, 26 Sept. 1985

歴史は、戒厳令関係の文書およびあらゆる種類の綱領、予測、分析と並んで「第２回路」（すなわち地下の独立出版物）で扱われる三大テーマのひとつである。完全な文献目録が存在しないために、どれほど多数の歴史物が検閲外で出ているか数えるのは不可能だが、その数は数百になると推測される。それは多種多様で、小さなエッセーから大部の書物にいたる。

地下出版所の事実上すべてが歴史物を扱っているが、これを系統的に取りあげているのは、まずクロンク、そしてノヴァ、クラクフのオフィツィナ・リテラツカである。出版地は主にワルシャワ、クラクフ、ヴロツワフ、ウッチである。本格的書籍は数千部単位で出ているが、在外出版所が出す主として短篇のリプリントは事実上全国で大量に出回っている。

中心を占める近＝現代史

主たるテーマは近＝現代史である。これより古い時代を扱った文献は稀である。たとえば、クロンクによるヤン・クハジュフスキの『白のツァー王国から赤へ』のうちの１巻、『テロリスト』や、〔80年〕８月前にグウォスが出したイグナツィ・モフナツキの『ポーランド民族の起源』、同じく８月以前にノヴァが刊行したパヴェウ・ヤシェニツァの『内戦に関する考察』などである。あとの２冊はのちに公式に出版された。

地下出版される歴史物は、ピウスツキ軍団の進撃から始まるが、大戦間期は比較的貧弱だと言える。もちろんこの時期を扱った本もいくつかあり、1920年戦争（ボルシェビキ・ロシアとの戦争）の研究もいくつかある。しかし圧倒的多数は1939年や第２次世界大戦、地下国家、ポーランド人民共和国の創成期に集中している。

一般的に言って、とくに地下出版のために書き下ろされた文献に関するかぎり、当面の問題の政治的エッセーが圧倒的に多い。これらは概して、１個の具体的問題に関する短篇である。総論的研究やより長期にわたる歴史研究、重要な現象の分析などは今のところ非常に少ない。この分野では書き下ろし文献はわずか２冊しかない。クレステノヴァの『ポーランド現代史』（1918―56年を対象）全２巻である。リプリント物――やはりごく少数である――では、クキエルの『ポーランド史：1795年～1921年』、ボブクーマリノフスキの記念碑的著作の第３巻、パヴェウ・ザレンバの戦間期20年の講話、などがある。

より最近の歴史、すなわち1960年代以降になると扱いはもう少しよい。出版物は、数はそれほど多くないが、きわめて広範囲にわたっており、しっかりしたものが多い。たとえば、コリブトヴィチの『1970年12月』、Ｊ・Ｊ・リブスキによるＫＯＲに関するきわめて包括的な著作（ＣＤＮ発行）。だがまずあげられるべきはホルツェルの『連帯』（クロンク発行）、シェイネルトとサレフスキの『シチェチン：12月－８月－12月』（ノヴァ発行）である。政治裁判に関する研究もあげられる。1981年12月13日以降、弾圧や反対派の行動、ストその他の最新情報を伝える大衆的刊行物が多数出た。この波は1982年後半のある時急に収まった（おそらくヘルシンキ委員会や各地ＫＯＰその他がこの種情報を集め始めたからであろう）。

これより前の時期を扱った文献の大部分は在外出版物のリプリントである。ひとつの非常に重要な分野、すなわち証言の分野における地下出版所の唯一のオリジナル出版は、40年代と50年代に政府中枢にいた人物とのパルバラ・トランスカの対話である。この分野では翻訳物さえ稀である。クロンクが、フルシチョフ回想録の抜粋や、戦後ポーランドへの初代米国大使ブリス・レーンの回想

記、国内軍高級将校との対話を基にしたシュタイナーのワルシャワ蜂起に関する著作、などの翻訳を出している。その他は地下出版所が在外出版所から手に入れたいわばでき合いの書物である。この種のものとして、プジャクやジュワフスキ、ミコワイチク、コルボンスキ、ノヴァク＝イジェジョランスキなどの政治家や運動家の回想記、ヘーリンク＝グルジンスキやチャプスキ、シフィアニヴィチ、オベルティンスカなどの強制収容所からの報告、ゴンブロヴィチ、ティルマンド、ワットら作家の回想記などがあげられる。

専門的著作の分野でもリプリントが圧倒的に多い。タルニェフスキの1956年、1968年、1970年代に関する有名な三部作、ブレグマンの国連成立史、クウォホヴィチの『守られなかった４つの条約』、1947年選挙に関するヴイチクの研究、コルボンスキの『地下ポーランド国家』、マツキェヴィチの『ピウスツキを知るかぎ』、ヴィシンスキ枢機卿およびＰＡＸに関するミツェフスキの著作、などがこれに入る。これら著作はすべてまず在外出版所から出た。国内で書かれた専門的著作もいくつかある。レオポルトとレハツキによる政治囚に関する研究、アンナ・ラジヴィウによるポーランド人民共和国における歴史教育の本、イェジェフスキによる1939年９月17日とカティン事件に関する著作、トマシェフスキとヴェンギエルスキによる国内軍ルヴフ管区の研究、ジェンチコフスキの『1945年の悲劇』、そして最近発行されたワルデツキによるポーランド農民党の研究などである。しかしこれら著作は一般に短かく、しばしばスケッチ風で、科学的全面展開を欠いている。

強い啓蒙的性格

わが隣人たちの歴史に対する関心が「第２回路」でとりわけ明らかである。これまでこの分野に関しいくつかの重要な著作が発行されている。シメツキの『オーデル川の回復』、フェイトの『プラハのクーデタ』（1948）、レヴィツキの『テロルと革命』（ソ連に関する）、カレール・ダンコースのスターリンとスターリニズムに関する著作、バルテルの1953年ベルリン革命に関する著作。

この大量の出版物の中に、一般的考察を加えた著作はごくわずかである。アダム・ミフニクが初期の時代にさかのぼってこの分野を検討し、何人かの名前をあげて類似点と相違点を指摘している。この分野で疑論の余地なく他の追随を許さないのが、ポーランドの過去200年の歴史の総合の試みでありながらなお親しみやすい概説の書でもあるタデウシュ・ウェプコフスキの『ポーランドとポーランド人の歴史に関する考察』（ＣＤＮ発行）である。

ボフダン・ツィヴィンスキも、東ヨーロッパにおけるカトリック教会を扱ったその著作、『火の試練』でより広いパノラマを描いている。

こうした大量の出版物は、直接、手短かに、てっとり早く語ってくれる文献に対する社会の要求に応えようとする。このような要求に応えることはもちろん歴史家の道義的、社会的義務ではあるが、彼はそこにとどまってはならない。わが国歴史の空白――1939年９月17日、カティン、ワルシャワ蜂起――もすでに十分、対象となっているかのようである。カティンに関する本がどれだけたくさん増刷されていることか。しかし実際、逆説的なことに、ポーランドの最近の歴史に関する数々のパンフレットのかなりの部分は読者には周知の資料しか含まれていない。人々はすでに知っていることを誰か権威ある人に確認してもらうためにこれらの本を読むのだと思われる。主として自習の道具として工夫された出版物も比較的少ない。ヴロツワフで出ている「生徒双書」がそのひとつである。これは学校教科書の補完として機能し、ヴロツワフの高校で無料で配られている。ＷＳＮが最近刊行を始めたシリーズ物も同じ役割を果している。これまでにヴィレンチクのポーランド社会党とポーランド連盟に関する２冊のパンフレットが出ている。これはグループ集会で朗読するようにできた15頁の小冊子である。学校のカリキュラムに含まれず、あるいは故意にゆがめられて教えられているテーマを取り上げる必要性がしばしば語られるが、これはまだ系統的には実行されていない。

歴史的テーマは多数の地下定期刊行物でもとりあげられていることを指摘しなければならない。しかしこれを系統的かつしっかりした基礎に立って扱っているのはごくわずかである。ワルシャワの季刊誌『クリティカ』のみがおそらく系統的かつ専門的に編集される歴史部門を持っている。

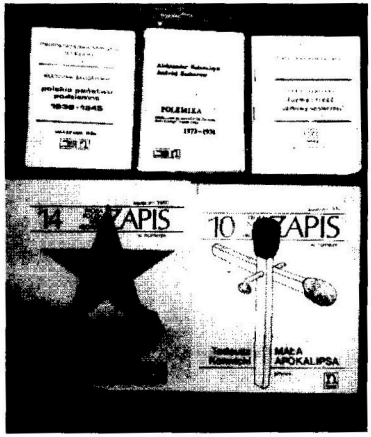
以上に対し何が追加されるべきか？　読者への

道が通じるのを待っている多数の著作がある。たとえば、すでに古典となっているフェイトの『人民民主主義の歴史』である。1940年代と50年代の全社会主義諸国の歴史を理解する上で重要な著作であるブレジンスキの『統一と抗争』がまだ刊行されていないのは実に奇妙である。冷戦関係の書物も西側では多く出ているにもかかわらず、何も出版されていない。ボルシェビキ革命から1941年6月22日にいたるソ連＝ドイツ関係に関する本格的研究も何ひとつ翻訳されていない。

ギャップは、出版物だけではなく、歴史知識そのものにも認められる。1944～48年のレジスタンス運動については何も知られていない。この問題はぜひ想起されるべきである。ＷｉＮ（自由と独立）に関するクルザ神父の本はひどい出来で、乱雑かつ多くの点で故意に誤解を招く。ポーランドのスターリン化に対する社会の対応については、「上」から見たその過程の記述はあるが、きちんとした研究は存在しない。1945年以降の海外亡命を対象とした独自の歴史書はまだない。「第２次世界大戦と占領期のポーランド社会のもうひとつの顔」と呼ばれる問題、すなわち国民の大きな部分が占領者と共存すべく順応した事実の究明が非常に重要であろう。1939～41年のソ連による占領は回想記や記事、一部の研究に断片的に現れるにすぎない。もっと具体的で包括的な説明が今なお必要である。戦間期ポーランドの各民族相互間の関係もごく部分的に扱われているだけで、多くがまだ謎に包まれている。このことは、討論や論争の中で繰り返し登場するポーランド人のユダヤ人およびウクライナ人に対する態度といった根本的な問題について言える。こうした問題には、関係者の誰も触れておらず、したがって今なおあいまいなままになっている。

現実の重圧からの解放

地下の歴史文献は非常に深い禁圧の表現だと考えられる。「古傷をひっかく」ことを試み、物議をかもすような状況や卑屈な態度および行動を想起するような書物は非常に少ない。すべてが共産主義者のせいにされている。彼らは悪の権化である。一般的に言って歴史、とりわけごく最近の歴史は、ポーランドでは、とりわけ誤って伝えられている。すべての人々によって。とりわけ政府によって。彼らは過去40年にわたって、攻撃的かつ侮辱的に偽造し、抹消し、削除してきた。これに対する反動として、神話と象徴の歴史が生まれた。偽造に対しては、分析や深化のいかなる試みも抜きに、決まり文句の寄せ集めが対置されている。第２回路の主砲は愛国主義的、連帯的である。1981年12月13日以降の状況の下ではこれはよく理解できる。それが専門的歴史家や社会学者の態度だとしても、これに文句を言うことはむずかしい。要するにそれは社会の反映なのである。



自立出版所ＮＯＷａ発行の地下出版物。上段左は、「ポーランドの地下国家：1939—1944」。下段右はＴ・コンヴィツキの小説「小黙示録」。

検閲されない歴史書は現実のでき事の巨大な圧力下にある。その役割は主として、われわれが勇敢で正しく賢明であるという、また最後まで闘うのだという信念をつき固めることにある。この圧力が弱まらないかぎり、われわれはイギリス人やフランス人と違って、最近の、あるいはもっと昔の歴史を深く、自己批判的に見ることはできないだろう。

〔訳：水谷　驍〕

僕は現在(いま)を考える
ボグダン・ボルセヴィチとのインタビュー

Szczęśliwe rozwiązanie (Rozmowa z Bogdanem Borusewiczem)
Kultura No.11/446, 1984, Paris

【編集部より】 パリ刊のポーランド語月刊誌『クルトゥラ』に掲載された、グダンスクの地下活動家ボグダン・ボルセヴィチとのインタビューを紹介する。インタビュー自体は昨年9月初めにおこなわれたもので若干古いが、地下での生活の一端がかいまみえて面白い。なお、スペースの関係で若干部分を省略した。ボルセヴィチは1949年1月11日生まれ。1970年からルブリン神学大学で学ぶ。76年にラドム・ウルススの労働者支援運動に加わり、78年にはバルト海沿岸地域自由労組設立運動の創設者のひとりとなり、『ロボトニク』および『ロボトニク・ヴイブジェジャ〔沿岸地域労働者〕』紙の編集にたずさわる。80年8月ストの組織者である。戒厳令以来地下に潜伏、84年6月、逮捕されたボグダン・リスの後任として暫定調整委（TKK）のメンバーになった。

僕が反対派になったいきさつ

――どうして職業革命家になったのですか？

ボルセヴィチ〔以下Bと略〕 なぜまた僕にそんな質問を？

――公安警察さえあなたをその道のプロと考えていますから。なぜその職を選んだのです？

B　人生の道は結果として地下活動とTKK(「連帯」暫定調整委）へと僕を導いたわけだが、特に意識的にこの道を選んだわけじゃない。主に偶然の組み合わせだ。ただ、それだけでもない。僕の生来の資質と家庭で受けた教育もある。だから1975年に、友人スタシェク・クルシンスキ（僕と同じルブリン神学大学の学生で白己教育グループのメンバーでもあった）がプライベートな手紙の内容を問われて逮捕されたとき、彼の援護に立ちあがったのも偶然ではなかった。その時からさ、僕がポーランドの共産主義政権と本格的に闘いはじめたのは。だから、「職業革命家」というのもあながち根拠なしとはしないな。

卒業後はバルト海沿岸地域に戻り、後に青年ポーランド運動を組織する仲間たちのグループとともにラドムの労働者援助に参加した〔1976年、食料品値上げ抗議暴動でラドムとウルススの労働者が弾圧された。彼らの援助組織として結成されたのが労働者防衛委員会KORである。〕――これも、たまたまそうなったというわけじゃない。そして、その関係からKORのメンバーになった。なぜ僕が？　それは事の成りゆきさ。単に僕がグループのうちで最年長だったからだ。それから80年8月のストと「連帯」があった。これについては周知の事実だから何も言わない。さらに戒厳令が敷かれ、その結果僕は今ご覧のような状態になった――潜伏して地下活動をしている。またも偶然のはからいで、僕たちのような地下に潜った人々だけが逮捕を免れた。（……）

――1968年3月事件はあなたのその後の運命にどういう影響を及ぼしましたか？

B　そうそう、1968年なんてのがあったっけ。すっかり忘れていた。それほど昔のことだよ。「連帯」時代も僕にとっては歴史の中に入っているし、KORは完全に先史時代だ。それ以前のことなんて記憶のどこかでくたばってしまった。僕は今日だいまを生きている。現在について考え、現在について語る。そうだな、1968年には19歳で、青少年から成人になるための通過儀礼の最中だった。それ以前から何かがおかしいと感じていたが、同世代の高校生や大学生が街で殴られるのを見て、深く考えたというよりは衝動的にビラをつくって仲間とまいて歩いた。そして逮捕された。驚いたことには、拘置所の中でも身長や肩巾がずいぶん

大きくなったよ。それより何より、精神的に成長した。取り調べ中や獄中で、体制のしくみを裏から眺めることができたし、尋問官がいかに卑小で下劣で理念のかけらも持っていないかがわかった。連中は、僕を刑務所へぶち込むのが任務だと自ら認めていた。それで給料をもらっているんだ。ひとりなんか、政府が命令するなら反対派を支援するとさえ言った。連中には思想なんてどうでもいいんだ。

移送中に脱走したあとで地元の新聞に載った僕への逮捕状はとてもショックだった。その時初めて潜伏したんだ。

――どこに？

B　森の中。5日間、パンの塊をかかえて。仲間たちは恐れをなして、僕を家にかくまってくれなかった。夜は冷えこむし、朝は落ち葉が身体中にはりついているんだ。仲間が頼んで、ある神父さんが僕を教会の地下室にかくまうことに同意してくれた。でも僕は、昼も夜も棺の並ぶ中で暮らすよりは刑務所の方がましだと考えた。その時はそう思ったんだ。僕への逮捕状には、何の容疑で手配されているか書かれておらず、ただ「危険な犯罪者」とされていた。僕が通った美術学校を捜索した時、公安警察は僕が強盗だか婦女暴行だかをしたと、とんでもないでたらめを言ったそうだ。連中は、人々が僕を助けるのを恐れたんだ。

1年半の刑務所暮らし（判決は3年だったが1969年に恩赦があった）で、僕は多くの経験を得た。だから鉄格子の中ですごした時は無駄だったとは思わない。

――それでは、あなたの職業革命家歴は1975年からでなく、68年からとしなければいけませんね。

B　いや、継続的な反対派活動を始めたのは1975年からだ。69年に出所した後、僕は学校へ戻った。（……）

――大部分のポーランド人は共産主義体制に反対ですが、一般的にはテレビにスリッパをぶつける位の反抗が関の山です。でも数少ない人たちはそうした反抗形態で満足しなかった。どうしてでしょうか。

B　僕自身について答えよう。最初は、嘘いつわりに同意できなかったからだ。なぜ年若い僕が反対派になったのか？　なぜなら、僕は歴史に興味があった。当局が嘘を言っていると感じていても

ボグダン・ボルセヴィチ

証拠をあげられなかった僕に、歴史はその証拠を教えてくれた。その時、一種の正義感の衝動にとらわれ、真実を言いたいと思った。しかし僕は、過去がねじまげられたことだけでなく現在が嘘で語られていることにも反発した。僕は人々が殴られ、不当に扱われ、侮辱されるのを目にしていた。労働者階級の、働く人々の国であるポーランドでだ。ぱりっとしたワイシャツにネクタイ姿で統治する奴らと、汚れた作業服の労働者との落差に目をつぶることはできなかった。1970年12月事件は、僕が間違っていないことを明白に示してくれた。言い忘れていたけれど、ここ沿岸地方では12月事件は僕らすべての経歴に深くつきささっている。

僕を反対派活動にふみこませた嘘への反発は、その後の活動の動機にもなった。僕は反対の声をあげるのを恐れなかった。僕だって人並みの恐怖心は持っていたが、それにより闘争心が抑えられなかったという意味だ。他人が苦しめられたり殴られたり刑務所に入れられたりするのを見て見ぬふりをする人々は、いずれひどい後味の悪さに襲われるというのが僕の考えだ。いまはその意味が分からずにいる人も、いつの日か彼らの子供たちから勘定書をつきつけられる。これはいわゆるサ

イレント・マジョリティだけでなく、体制の協力者とされる役人や警官にもあてはまる。戒厳令中に、自分の息子からつばを吐きかけられた警官がいたと聞いたことがある。（……）

地下潜伏と私生活

――あらゆることに犠牲はつきものです。反対派としての生活にも。あなたと同年代の30代の人たちは職場の地位も安定し、家庭を持ち、住宅や自動車を手に入れている。そうした点を後悔しませんか。

B　あらゆることに犠牲はつきもの、と君自身言ったじゃないか。犠牲がなければことは簡単、社会の全員が反対派活動をするだろう。それでももし僕が後悔するとすれば、主に私生活の面だ。出世はあまり関係ない。僕がどう出世できるっていうんだい。

――たとえば歴史家として。学問の面で同年代の人より10年遅れてしまったでしょう。

B　学問を専門職にしている連中から比べれば、の話だ。そんな人々はせいぜい20％だ。歴史家の多くは警察に勤めている。僕は警官になるより職業革命家の方がいいね。それに僕は出世のために勉強したんじゃない、知りたいことがあって勉強したんだ。だから何かの大きなチャンスを逃したとは思っていない。だが私生活は違う。確かにひとり暮らしには慣れたし、それなりの利点もあるが、同時に家族というものにも心をひかれる。僕の年ならそういう願望はまったく普通だろう。僕は闘士に生まれついたわけじゃなくて、状況によってこうなったんだ。ただ、僕の人生の転換点はずいぶん早い時期に来たので、何を失ったのか、自分でもよくわからない。

――おそらくはそれが一番の残念な点？

B　僕は、以前から、適度に普通に生活しようと努力している。（……）

――どういう意味ですか。

B　普通に眠り、食べ、地下室に坐ってばかりいず、娯楽を楽しみ、同時に普通のやり方で仕事をする。仕事は重ならないよう配分している。山のような仕事はいらいらするから。つまり……

――オフィスへ通うように？

B　ちがう、ちがう。僕の仕事には興奮やスリルはない。

――マンネリ化もまた危険です。

B　それはわかっている。

――多くの“非合法者（地下潜伏者）”と比べ、あなたの私生活は、結婚問題は別として、最近までまんざらでもなかった。最近、変化があり、あなたは父親になりましたね。若い父親としてどんな気持ちですか。

B　非常にいい気持ちさ。それは僕が普通である証明でもある。（……）家族が増えたのは、何というか、計画的なことだった。もちろんそれに伴って面倒や負担はあるが、将来どうなるかに関係なく、僕は子供がほしかった。

――政治情勢にこのまま変化がなければ、あなたはお子さんの成長に、普通に父親らしくかかわることはできないでしょう。

B　それはその通りだ。しかし極東航海の船員だって、家族とは年に1～2回しか会えない。職業上の特殊性さ。

――子供がいることであなたの反対派活動にどのくらい影響が及ぼされると思いますか。

B　全く関係ないと思う。

――しかし、家へ帰り、乳母車を押して散歩に行きたいとは思うでしょう？

B　当然さ。でも、もしもある一線を超えてしまえば、再びは戻れなくなる。

――そのことを相手の女性に言ったのですか。

B　言った。

――それで？

B　べつに何も。すべてオーケーさ。彼女には子供が生まれる前にさんざん言った。彼女は何の幻想も抱いていない。彼女は――籍は入れていないが、感情的なだけでない絆を感じているから、むしろ妻と呼びたい。それに、昔も家族はいたが僕の決心に影響はなかった。

――両親や兄弟姉妹の場合は、ちょっと違うでしょう。

B　母は70歳くらい、父はさらに年上だ。母と一緒に暮らしていた時、母がどんなに僕のことを不安に思っているかは知っていた。活動したくない人はいつも何らかの言い訳を見つけるものだ――母、父、妻、子供、病気、勉強、出世。

ＴＫＫの今後

——ということは、私生活の状況変化によって、現在議論されている、ＴＫＫを解散してメンバーが地上に出る可能性についてのあなたの意見が変わることもないと。

Ｂ　解散反対の立場は変わらない。ただ、ある条件の下では解散してもよいとは思うが。何よりもまず、ＴＫＫのかわりの役を担う組織に、少なくともギエレク時代なみの寛容さで、公然活動の可能性が存在しなくてはならない。その組織には、かつての全国委員が加わらなくてはならない。

——その条件が満たされる現実的展望は？

Ｂ　僕の言っているＴＫＫ解散は政府にとっても悪いものじゃない。反対派のコントロールがしやすくなるし、西側の経済制裁解除も期待できる。しかしここで第２の条件がある。残る政治囚全員の釈放だ。これがなければわれわれが地上に出るなど問題外だ。ヤルゼルスキはこの点を真面目に考えねばならない。彼にチャンスが与えられるのは今年（1984年）12月末までだ。

——ヤルゼルスキは、チャンスが与えられているのはあなたたち地下潜伏者に対してだ、と言っていますよ。もちろん、印刷機をかつぎ、協力者の住所氏名のリストをポケットに入れて出頭すればということですが。

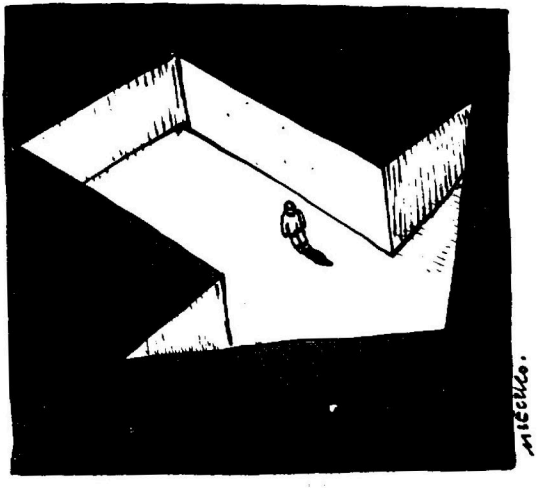
Ｂ　公然と活動する地平が用意されなければ、われわれは逮捕されるまで地下活動を続け、活動規模も大きく活発にする決意だ。

——ヤルゼルスキは何度も、80年８月以前にも81年12月以前にも戻ることはないと言明しています。つまり当局の言い方では政府の放任主義と大衆の無政府状態の時代、民衆の言い方でいえば、非合法だが政府の寛容のおかげで公然と活動した反対派モデルと「連帯」の形で合法的に活動した反対派モデルの時代へは戻らないと。ヤルゼルスキのこの見解が変わるあてはないのでしょうか。

Ｂ　ヤルゼルスキとラコフスキ〔副首相〕は支配のおいしい所だけを味わっていたいのだろうが、統治というのは命令する快感だけでは成り立たないものだ。何らかの政治的展望を持たなくてはならない。その政治的展望が警察力による地下の壊滅だとしても、戒厳令から２年半もたつのだから、うまくいかないことはわかったはずだ。第１に、「地下」は声明に署名する何人かの活動家だけではない。第２に、その何人かを逮捕するだけでも公安警察はひどく苦労している。

——そうはいっても連中は地下活動家を捕まえている。

Ｂ　だが逮捕された人のかわりに常に新たな人材



どこへも抜けようがない巨大な矢印

が入っている。だからこそ地下活動の自主的解散は当局にとって大きな利益になる。しかしそうするには当局がわれわれの条件を受け入れなくてはならない。そうしないうちは、ＴＫＫの存在に意味がある。その間は社会もわれわれを支持してくれるだろう。（……）

――もしもＴＫＫが解散に至った後に当局の方針が厳しいものに変わったら、その結果生まれる体制は極めて重苦しくなるでしょう。

Ｂ　われわれは法的保障を得ることが必要だ。

――ＴＫＫの消滅が降伏の印象を与え、社会的抵抗にマイナスの影響を及ぼすことはないでしょうか。

Ｂ　最初のうちはたぶんそうだろう。当局が妥協に応じるのは、それを期待してのこともあろう。われわれにとっても、完全に良い形の解散はない。考えてみたまえ、長いことＴＫＫの存在は社会を抑制する働きをしてきた。人々は不満を爆発させるきっかけとなるスローガンをＴＫＫに期待していた。ＴＫＫがなければ、戒厳令期間中に何度かの爆発が起きたろう。ＴＫＫがブレーキ役を果たした典型的な例が、1982年10月の「連帯」非合法化の後のストライキだ。その他にも、社会のエネルギーが非常に高まった時は何度もあった。だが、人々が最初の信号を出すべきグループ（ＴＫＫ）の存在を意識していたから、人々は信号を待った。1983年なかばまで、社会は、ＴＫＫが下すことのない決定を待っていた。

――下すことのない決定？　なぜ？

Ｂ　もし失敗したときに責任を取ることができないからだ。だから、もしわれわれが今後も地下活動を続けるなら、われわれは仲間をひろげねばならない。現状では、「存続、活動、長征」がＴＫＫの支配的な概念だ。だが長征には目標が必要だ。

――その目標が人々の意識の中で消え去ってしまった。

Ｂ　われわれにしても同じさ。だから活動を続け、地下出版を拡大するのがすべてだ。社会的抵抗は弱まるだろう。革命的な波が２～３年以上にわたって持続することなどありえない。わが国の場合も、波は徐々にひいていく。社会運動が国家機構に勝てるのは短期間だけだ。だからわれわれはこれがどれ程続くものかを知らねばならない。

――ＴＫＫは一度解散してしまえば再び作ることはできないのだから、かわりに、「地下か、または公然たる反対派」という２極構造の方が良くはないだろうか。

Ｂ　お互いの活動を補完しあい、社会のために実際的に何かができるあらゆる場を利用しなければならない。しかし、大きな問題は、両者を調整する権威をどこに置くかだ。人々は、誰の言うことをきけばいいかわからなくなってしまうだろうからね。それに、地下と公然反対派それぞれの活動領域を厳密に定めるのは難しい。遅かれ早かれ両者は競合しあうようになろう。

――これまではＴＫＫとワレサは基本的には声を一つにして語ってきた。なぜ今になって不協和音を恐れるのです？

Ｂ　ワレサと一緒なら何でも最後までやりとおせた。より大きな全国委員会活動家のグループからなる集団は、自己の内部力学に従って動く。われわれの道が分かれるのは、社会学的、心理学的、そして純粋に技術的な見地からだ。

――とするとＴＫＫを解散するかわりに強化する方が良いのでは。

Ｂ　今後の個人的活動の中ではＴＫＫと地区細胞の強化は不可欠になるだろう。

――しかし、新しい発想も不可欠でしょう。

Ｂ　新しい発想は新しい人が持ってくる。また、古い発想でも、工場内新聞のように有効性が認められるものは実行の努力をする価値がある。新聞が出ているところでは「連帯」は生きており、工場秘密委員会が会議しかしなかったところでは活動は死滅しはじめた。ある期間を過ぎると、委員会の各メンバーには互いの考えが全部わかってしまう。ＴＫＫのわれわれと同様に。声明を発表する必要がなければ、われわれＴＫＫは会合を開くのをやめてしまっていただろう。ともかくも基本的な仕事は各地区内でちゃんと実行されているわけだし。戒厳令当初は工場秘密委員会は定期的会合を持ち、議論していた。しかし議論の収穫を発表しなければ議論しても時間の無駄だ、と賢い人々は気付いた。大工場のそれぞれが新聞を発行せねばならない。新聞は抵抗を組織する。編集、印刷、配布の過程で人々は共同参加意識を得る。

社会的抵抗の継続を

――現在の社会的支持をどう評価しますか？

B　地方議会選挙の結果（1984年6月。バルト海沿岸3都市では投票率は50％を少し超えた程度）からいって、支持は明白だ。しかし、さっきも言ったように活発さはしだいに弱まるだろう。もちろん、ある危機的瞬間に至るまではの話で、その瞬間の後は爆発的に支持が増し、連鎖反応が起きよう。

――そのためにわれわれは何を目標に立てればよいのでしょうか。

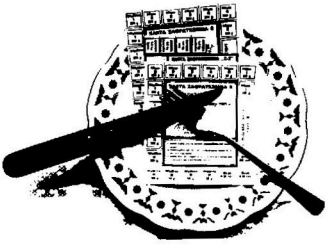
B　社会的抵抗の継続だ。

――しかし抵抗は手段であって……

B　現時点ではわれわれの目標にならねばならない。僕は366回目のゼネストの話などする気はない。ゼネストは、勝つにせよ負けるにせよ、もうずっと前に行われるべきだった。また、政府に588項目の妥協案と真面目な交渉を申し入れるべきだなどと言う気もない。全体的な目標をたてるかわりに、部分的な、実現可能な目標を示すことが必要だと思う。全面的ボイコットをやめ、影響を及ぼせる具体的な場面への一部参加へ移行することだ。もうじき勤労者評議会の選挙がある。それに参加すれば、真に社会的な団体の中での自主管理形成のチャンスがある。自主管理法は非常に利用価値がある。たしかにヤルゼルスキが官製労組の要求を聞いて自主管理法を改訂することも考えられる。官製労組は自分たちの特権が少なくて勤労者評議会の権限が大きいことに怒っているからね。しかし僕は、受け入れることも、握りつぶすことも政府にとって都合悪い、そんな手をわれわれは打たなければならないと思う。たとえば、勤労者評議会の廃止は政府の信用をさらに失墜させる、しかし評議会を容認すれば従業員に工場における実際的影響力を与えることになる。

――部分的目標の提示とならんで、大衆の疑問に答えることもやはり必要でしょう。人々は、まだ自分たちは「連帯」のために闘っているのか知りたがっていますが。

B　「連帯」のために闘っている。組織としての「連帯」をあきらめる理由は全然ない。一部の活動家にはそうした傾向がみられるがね。「連帯」を何やらあいまいな「複数主義」とやらにおきかえるのは間違いだと思う。「複数主義」は一般的方法論として、「連帯」を念頭においている場合なら良いが、何かべつの「仕事」「分別」「規律」なんていう名前の組合の出現を含意しているなら許されない。地上で公然生活をしている人々は、新しい労組づくりでなく自主管理に集中すべきだ。



今日の食事は――肉の配給券

――カジミェシュ・シフィトンがやっているカトリック労働組合組織化のこころみについてどう思いますか。

B　僕はシフィトンの自己犠牲精神には賛嘆を禁じえないが、ハンストを圧力手段に利用しつつそうした組織づくりをしようとするなら、教会に相談すべきだ。政府と教会の両方を敵に回したら何にもならない。

――当局に打ちかつことはできると思いますか。

B　できると思う。同時に、当局も完全なバカではないと思う。内務省は、社会の抵抗の規模を認識している。抵抗の成果が2回の恩赦なんだ。共産主義政権は、警察力に頼る方法では社会を鎮静化させられないと理解した。

――それならなぜすべての政治囚を釈放してわれわれをおとなしくさせないのでしょう。

B　たぶん、派閥争いのポイントかせぎのためじゃないかな。いずれにせよ、連中が政治的誤りを犯すのはいつものことだ。

――中途半端な決断しかしない政府が、「連帯」メンバーの公然活動という大きな危険を、どんな形にせよ認めることがあるでしょうか。

B　もし僕が理論家なら、「わからない」と答えるだろう。でも実践家としての僕は、こう言うね。「試してみる価値はある」。

［訳：高橋　初子］

ポーランド現代史断章 ⑧

1976年 ラドム・ウルスス事件

——《成功宣伝》のはてに——

工藤 幸雄

ゴムウカとギエレクの人物や施策の相違点を分析した前号の伊東孝之さんの澄明な論文のまえには頭がさがる（未読の向きは、しかとお読みになるよう勧める）。歴史家の鋭い目のいわば《解像力》の持ち合わせがない私としては、この小文では、「ラドム・ウルスス事件」（1976年6月。以下では便宜上「6月事件」と書く）と呼ばれる戦後ポーランド史の出来事をめぐって多少の感慨を述べるにとどまるだろうと、予めお断りしておく。

「6月事件」が発生したのは、私の帰国から1年3カ月を経たあとである。「ああ、またもや70年の《12月事件》のくり返しか」と、まずあきれた覚えがある。なぜ、またもやか。ご多分にもれず、不意打ちの値上げによって労働者市民の怒りを爆発させたことである。しかもギエレクもヤロシェヴィチも、6年まえには暴動発生の現地に乗り込み工場労働者の不満や怒りをなだめた経験の持主である。値上げの計画をやむなく引っこめて、今後は必ず相談づくでやりましょう、という当時の約束は、まだだれもが忘れていない。そこへ突然の値上げ案の発表である。またもや、の嘆きは当然なのだ。その4年後、80年7月、ギエレク政権は値上げ計画強行の挙に出て失脚した。ゴムウカに続く、またもやの連続であった。

「12月」、「6月」、「7・8月」——ポーランド社会主義は、そのつどつまづいた。つまづき続けてきた。その年月、「連帯」が浮かびあがった日々があり、そして「連帯」もまたつまづいた。かつての民衆蜂起、「11月蜂起」、「1月蜂起」、「ワルシャワ蜂起」が潰えたように。つまづきの終点に軍政が腰をすえている。

*　　*　　*

「6月事件」の値上げ幅は、砂糖100％、バター・チーズ50％、魚69％、野菜30％などだ。肉類の値上げだけが妥協でとおった。70％を35％におマケしてである。それよりも問題は逮捕2500人、うち有罪の判決を受けた者、ラドムが261人、ウルススが112人、その他に解雇数百人という数字の大きさである。77年7月、受刑者は全員特赦されるが、その実現をかちとったのが労働者防衛委員会KORである。

話を戻す。事件についてノーマン・デヴィスは『ポーランド史』に書いている。「ストライキ、抗議、デモが全国のほとんどの都市や工場で爆発した。ワルシャワ〔郊外〕ではウルススのトラクター工場労働者が鉄道を破壊してパリ＝モスクワ間の急行列車を占拠した。ラドムでは党委員会の建物が焼け落ちた。〔クラクフの〕ノヴァフタでは人影の消えた製鉄所の構内に軍隊が送り込まれて作業についた。〔値上げを撤回したギエレク政権は〕急増する外債（その利子のぶんだけで輸出による収入の半分が消える）を返済するため、もともと労働者向けの食品や消費物資を含めあらゆる品目を輸出に振り当てた。こうして社会主義の発足から30年も経てポーランドは緊急な耐乏措置に直面した。食肉不足と停電は日常のこととなった。……ギエレク時代の最も重要な成行は、統一された反対派の出現であった」。

ワイダの映画「大理石の男」には建設中のカトヴィツェ製鉄所が映し出される。今は支配人と呼ばれるかつての練瓦積み工から旧友ビルクトの思い出を取材する場面である。ビエルート時代の暗黒にギエレク時代を対比させる象徴的なシーン（たとえば支配人はしきりにヘリコプターで移動する！）の片隅にスローガンの記された横断幕が見えている。その文句に Polak Potrafi（「ポーランド人ならやってのける」とでも訳しておく）とあった。

この作品は77年3月に封切だから撮影は「6月

事件」の直後でもあろうか。なるほど、「やってのける」ポーランド人は、たしかにいた。それは女主人公のアグネシカであり、ワイダら実在の映画人であり、彼らの精神を引きついだ「連帯」の人びとである。その後に、「やってのけ」たのはヤルゼルスキであり、ZOMO（機動隊）であった。

＊　　＊　　＊

1冊の本を書棚で見つけた。大した本ではないようだが、読み方によってはそれなりに役に立つ。83年の官許出版物で「夢と現実」の標題に「ポーランド危機の解剖」と副題がついている。筆者は77～80年、ギエレク政権の経済顧問団の1人、元駐日大使で亡命したルラシュ氏の同僚であろう。

あちこち眺め回しての早急な結論だが、この本はギエレク政権下の計画経済が、いかにだらしなかったか、つまりポーランドの社会主義が、いかにだめかを書きつらねたものと読める。

▷カトヴィツェ製鉄所の建設を急いだあまり、数カ所の発電所の建設が遅れに遅れてしまう。すべて工場を建てるのに気をとられ、電力生産がおろそかになる。こうして深刻な電力不足に足をとられる。電力不足は大規模工場が次々に完成するにつれますます悪化した。

▷部品の供給面もひどい。その結果、77年に運転不能の国鉄バスは全体の4分の1、故障車の数は年々増え続けた。鉄道では《運輸手段》〔機関車のことか〕の3分の1が使いものにならなかった。▷経済管理の能率化をめざして大々的なコンピュータ化が開始されたのが73年。74年末にはコンピュータ700台、ミニコンピュータ450台の陣容がそろう。国産品では追いつかないから勢い輸入に頼る。コンピュータの数では東ドイツやチェコスロヴァキアにたちまち追いついた。80年には大型50台を含め6000台にまで急増する計画だった。75年当時の機種はソ連のほかアメリカの各社、イタリア、などなど14種のまちまちである。こうしてできた情報センターの多くではコンピュータは取り扱える要員がいないため遊休のままほっておかれた。▷生産管理の向上には計画委員会に最新の情報を集中すること。というわけで新鋭のコンピュータが置かれた。上層部にはモニター、テレビカメラが与えられ、テレビ電話で顔つき合わせて話し合えるシステムが完備する。だが何の実も結ばなかった。でっちあげの情報の流れが入ってきては適切な決定をくだすどころではない。

一九七〇年代のメーデー光景
ほほえむギエレクの大きなプラカード

やや戯画化して（ただしウソではない）紹介すると、こういうテイたらくなのである。「社会主義」は、経済運営を妨げるためにあるのではないか、とあきれてしまう。このコンピュータ化の推進役を務めた党・政府の混合委員会というのがある。委員会を主宰したのが、ヤギエルスキ副首相、あの輝かしい8月の（そして今から見ればまやかしに満ちた）政労合意の政府側代表その人である。

＊　　＊　　＊

76年6月、約80％の値上げ強行が党アクチブの前で発表された時、代表たちは討議もせずに主要な職場へ世論打診（コンサルテーション）のために散っていった。現場の人びとは、何のための値上げか理解できなかった。ギエレクの《成功宣伝》が徹底していたからである。すると値上げ反対の嵐は、ギエレク自身が呼び込んだことになる。若者によれば、《成功宣伝》とは「前はだめ、今は順調」robiono źle, robi się dobrze の一色に塗りこめることであった。だが、軍政のもとでKORと「連帯」に罪を着せて、同じような宣伝が行われていないという保証はどこにもない。

作ってみませんか ポーランド料理

工藤久代さんに聞く

今回は冷たいスープ「フウォドニク chłodnik」をご紹介します。先月が熱いスープで今月が冷たいスープとはおかしいじゃないかとおっしゃるむきもありましょうが、人生なんてそんなもの。このフウォドニク、山に鮮かな、鮮かすぎるほどのピンクのスープで、見た目はちょっとびっくりします（カラー写真でお見せできないのが残念）が、ビーツの甘味とヨーグルトの酸味のかもし出す味はなかなかのもの、栄養学的にも野菜がたくさんはいって健康的です。ぜひ一度お試しを。

材　料　（5～6人分）

ビーツ　　小2個（大きいのなら1個）
セロリ　　1本
セリ、ミツバなど　　適宜
レモン汁　　4分の1個分くらい
固形スープ　　3個
プレーンヨーグルト　　半カップ
いただく前に乗せる具（Ⓐ）　固ゆで卵2個、ミツバやセリやパセリといった香味野菜、はつか大根、カブ、きゅうりなど生でも食べられる野菜を適宜。

作り方

① ビーツを竹グシが通るくらいまでゆで、冷ます。卵をゆでて固ゆで卵をつくっておく。ビーツの皮をむき、厚さ2～3ミリ、1cm角くらいの見当できざむ。
② きざんだビーツを水5～6カップとともにナベに入れて火にかける。セロリの茎やセリ等もきざんで入れて煮る。まっ赤な色が出たら、固形スープ3個を入れ、塩・こしょうで味をととのえ、最後にレモン汁を加える。火をとめて、冷ます。
③ 冷めたスープに、ヨーグルトを入れてまぜる。
④ 固ゆで卵はタテに4～8つ割り、Ⓐの野菜は薄く小さくきざんでおく。
⑤ カップに③のスープを入れ、④の卵や野菜をうかべていただく。

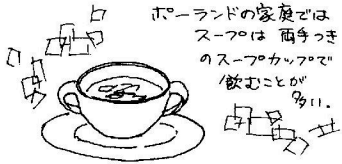
工藤久代さんのひとこと

以前この欄でご紹介したバルシチと同じく、ビーツの鮮かな緋色を生かしたスープです。バルシチと違ってビーツを実として一緒に食べますし、ほかにセロリなども入りますから、冷たくてきれいな野菜スープといえます。セロリのほかにもお好みでにんじんなどの野菜を入れてかまいません。私は家の近くに畑を借りてビーツを作っていますので、ビーツの葉柄の部分もきざんで入れてしまいます。最後にうかべるゆで卵や香味野菜の色がピンクのスープに映えて、とてもきれいです。ただ、はじめての方はあまりのピンク色にたじろがれるかもしれませんね。色具合はヨーグルトの量の加減で変えられますので、ご家庭でいろいろバリエーションを工夫なさるのも楽しいでしょう。

作り方の②で、レモン汁を加えるのは、ビーツから出る赤い色（水溶性のアントシアン系色素）が酸にあうと安定し、鮮かな色になるためです。もしレモンがなければ、酢少々で代用して下さい。

フウォドニクは、ヨーグルトを入れてあるため、あとで再び火を入れるというわけにゆきません（ヨーグルトの乳たんぱくがかたまってしまいます）。残ったときは、冷蔵庫で保存して下さい。2～3日はじゅうぶんもちます。

とりあわせとしては、肉料理によく合います。肉料理、黒パン、サラダ、フウォドニクの組み合わせなど、休日の朝昼兼用の食事に良いのではないでしょうか。



【2頁より続く】ト等でも教会内外での5周年記念行事が報告されている。こうした記念行事では「連帯」のバッジ、ポスター、絵ハガキ、切手なども売られた。公式報道によれば、グダンスクとシチェチンでは当局公認のグダンスク協定記念行事も行われたという。ロンドンで開かれた「連帯」5周年記念集会で、英国労働組合会議（TUC）書記長は「連帯」支援を確認。

9月1日　ローマ法王はポーランド語でポーランド人に「連帯」の成果を葬らぬよう説く。

9月3日　ウルバンは定例記者会見で、8月31日の出来事に関する西側報道は嘘だと非難。また「連帯」の作成した500頁の報告書については、自由ヨーロッパ放送〔東欧向け西側放送〕傍受記録でしか読んでいないが、あれはプログラムとはいえず何ら目新しいことも言っていない、ポーランドの現在を侮辱するものにすぎない、と述べる。

9月6日　ワルシャワTVは、ソ連、東独、ポーランド3国共同軍事演習が行われていると伝える。

9月7日　グダンスクでグレンプ枢機卿とワレサが20分間会談。会談内容の詳細は不明。

9月9日　100名の「連帯」活動家が国会選挙ボイコット呼びかけを発表（本誌4頁参照）。ワルシャワのTVに「連帯」の海賊電波がわり込み、画面に「『連帯』ばんざい」「ボイコット」の文字が数回出た後、地下の「ラジオ連帯」受信方法も示された。

9月10日　ウルバンは記者会見で、ポーランドの公害で生態系が危機に頻していると西側報道を否定。

9月12日　戒厳令下で非合法化された諸労働組合の代表8人が西側記者と会見、国会選挙で投票しないことを表明。同時に、複数組合主義をめざして「連帯」と共闘している教員組合、自主労組、産別労組の活動が報道されないことに不満を表わす。

9月13日　9日発表のボイコット呼びかけの署名者の幾人かが短時間拘留され警告を受けたと伝えられる。

9月14日　ヤツェク・クーロンが内務省に呼び出され、6月のイェディナク逮捕の証人として4時間の尋問を受け、同時に「反国家活動」について警告される。

9月15日　ヤスナグラ寺院へ5万～7万人が巡礼、ヴロツワフ大司教のグルビノヴィチ枢機卿がミサを司式。ワレサはじめ「連帯」指導者も祭壇下のひな壇に並び、群集は「連帯」旗やVサインを掲げる。

9月17日　ワレサ夫人、ワイダ監督夫人を含む著名な5女性が、独立出版に関係したとして6月に逮捕されたワルシャワ大講師ミロスワヴァ・グラボフスカ博士の釈放を求めるアピールを出す。

9月18日　ポーランドの加盟申請に関連してIMF代表団が到着、2週間滞在して経済報告を作成する予定。

9月21日　M・グラボフスカ博士ほか4名が「人道的見地から」釈放される。

9月23日　軍への宣誓拒否（兵役拒否ではない）のかどで1984年12月に学生運動家が2年半の判決を受けたことに抗議して、ワルシャワの8人の青年（22歳～30歳）が国防省に軍登録証（17歳以上の兵役に適した青年男子全員に交付される）を返上する。

9月26日　ワレサは国会選挙に投票しないと述べる。

〔訳編：高橋初子〕

編集後記

☆10月13日（月）戒厳令後はじめてのポーランド総選挙が実施されました。「連帯」は早くから投票ボイコットを呼びかけ、投票率が偽造されないよう監視体制をとってきました。政府発表によれば投票率は78.86%と、前回地方選挙（84年6月）を上回ったとのこと。他方、14日発表の「連帯」の予備的集計によれば、グダンスク、ワルシャワ、ヴロツワフで投票率は50%を切ったといいます。

☆全国区得票率がヤルゼルスキ45位、ラコフスキ50位（最下位）との発表はいかにもポーランド的。

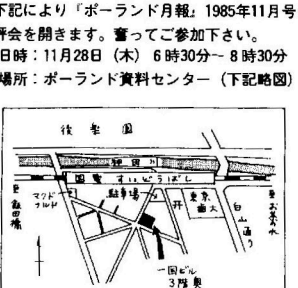
☆会員・読者の皆様の声を直接聞きたいと、右欄のとおり、合評会を開催します。ご批判、ご注文等、ご意見をお持ち寄り下さい。できれば今後、定期的に開催したいと思います。85.10.21　（み）

『月報』11月号合評会

下記により『ポーランド月報』1985年11月号の合評会を開きます。奮ってご参加下さい。

日時：11月28日（木）6時30分～8時30分

場所：ポーランド資料センター（下記略図）



ポーランド月報 一九八五年十一月号（通巻44号）
一九八五年十一月一日発行（毎月一回五日発行）
一九八四年一月十日第三種郵便物認可

ユーモア館

党機関紙『トリブナ・ルド』の読み方。
有害危険なので注意して読みましょう。

'85年秋期開講!!
マヤコフスキー学院

ロシア語

コース	開講	曜日	講師
文芸・読物 基礎コース	10/21	月	谷垣恵子 浦雅春
中級読物 コース	10/22	火	坂本博 近藤昌夫
文学鑑賞 I	10/25	金	江川卓 鴻英良
文学鑑賞 II	10/23	水	原卓也 長縄光男

ポーランド語

コース	開講	曜日	講師
初級前期 コース	10/24	木	長與谷 工藤幸雄
初級後期 コース	10/25	金	坂倉千鶴
会話コース	10/21	月	ロムアルド・フシチャ

●授業開始／10月21日～10月25日　●期間／6ヵ月
●時間／PM 6：30～9：00
●授業料／入学申込金5,000円ロシア語・ポーランド語30,000円
●問合せ／中野区東中野1－41－5 TEL 362－8772　マヤコフスキー学院

発行所・ポーランド資料センター　〒101 東京都千代田区三崎町2－10－5 一国ビル3F
電話 03－261－2585　郵便振替 東京 2－81069
Center for Polish Research　%Kazukuni Bldg. 3F 2－10－5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101
定価400円・年間定期購読料4600円（送料共）